東南アジア研究　42巻３号　2004年12月

ゴムが変えた盆地世界
――雲南・西双版納（シプソンパンナー）の漢族移民とその周辺――

深　尾　葉　子*

Socioecological Transformation Triggered by National Rubber Plantations in Yunnan, China: The Impact of Han-Chinese Immigration into Xishuangbanna since the 1950s

FUKAO Yoko*

This paper traces the deforestation of Xishuangbanna, Yunnan province, over several decades, analyzing the impact of changes in social structure on the forest. Before the establishment of the People's Republic, more than 60 percent of this area was covered by forest. The Hani and Lahu peoples lived in the mountainous rainforest and the Dai people cultivated rice fields in the river basin of a Mekong tributary. The introduction of rubber plantations in the 1950s by the Han people triggered the drastic collapse of this stable socio-ecological system. In the 1960s, several hundred thousand young urbanites from throughout China were forced into this area and exploited the mid-altitude rainforest. In the 1980s, the Hani and Lahu followed the Han example, starting private rubber plantations in the higher altitudes. At present, state-run Han rubber plantations occupy the foot of the mountains and Hani and Lahu private plantations cover the mountainous areas. Almost all rainforest has been lost in this basin.

Keywords: Mekong watershed, Xishuangbanna, rubber plantation, deforestation, Dai, Hani, monoculture, Menglong basin, Sacred Forest-Long Lin

キーワード： メコン集水域，ゴム栽培，漢族移民，国営農場，盆地，熱帯林の喪失，プランテーション，モノカルチャー

* 大阪外国語大学外国語学部； Faculty of Foreign Studies, Osaka University of Foreign Studies, 8–1–1, Aomatani-Higashi, Minoo City, Osaka 562–8558, Japan
e-mail: fukao@osaka-gaidai.ac.jp

はじめに

西双版納（シプソンパンナー）は雲南省の南に突き出た部分，メコン河流域では，中国領のもっとも南に位置し，ミャンマー，ラオスと国境を接している（地図１参照）。気候は熱帯および亜熱帯気候に属し，多様な動植物に恵まれた豊かな土地である。歴史的には，盆地を中心として，タイ族によるムアン権力の連合がこの地を支配し，ビルマ，ラオス，タイ北部につらなる地域として，山地系諸民族やタイ系民族が往来していた。

中国の影響力が強まったのは18世紀の初め頃と言われ，ムアン首長に土司としての職名が与えられ，それまでビルマの影響力が比較的強かったこの地に，中国の本格的な影響が及び始めた。その後，20世紀になって，はじめて県制がひかれるが，タイ族のムアン権力である土司の実質的な支配は，1949年の中華人民共和国の成立まで続くことになる［加藤 2000: 50］。

1950年代のこの地域は，森林被覆率が65％，「壩地」と呼ばれる平地にタイ族の水田が広がるほかは，山地民族が焼畑や狩猟で利用する山地と原生林が一面に広がる大地であった。漢族が容易に近づけなかったのは，「瘴癘の地」と呼ばれたこの地の熱帯性の気候と，コレラ，ペスト，赤痢などの伝染病，そして人を拒むかのような鬱蒼たる森林と野生動物に阻まれたためである［尹 2000: 7］。

その後，半世紀が過ぎて，その様相は一変したといってよい。50年代に20万人足らずであった人口が1990年代には80万人に増加し，おおまかに言ってその三分の一が漢族，三分の一

地図1　雲南省と西双版納タイ族自治州
出所：中国地図出版社『雲南省地図冊』より作成。

がタイ族，残りの三分の一がその他の少数民族となっている[1)]（表１参照）。また，「公路」が平野部を貫き，郷政府や県城には商店が建ち並ぶ景観は，50年代初期には想像もつかないものであっただろう。何よりも大きな変化は，森林面積が，公表された数値でも70年代後半には25％前後と激減していることである。ことに州南部を中心に中標高の山地のほとんどが，さらに近年では，標高1,000メートルのぎりぎりの地域まで，一面ゴム園と化している。

現在，空から西双版納に近づくとき，眼下に広がる緑野の大地は，飛行機が高度を下げるにつれ，かすかに等高線状の横線が刻まれていることに気づく。着陸間近になるにつれ，よりはっきりと見えるのは，その緑の山々が，実はすべてゴムの植林で覆われているということである。どの山もすべて，単一の種であるゴムだけが植えられているいわばゴムの「畑」であり，

表1　1960年代から90年までの民族別人口の遷移

	1964	1982	1990
タイ族	147,639	226,467	270,192
ハニ族	58,158	113,761	148,489
漢族	83,044	18,864	209,615
ラフ族	19,961	33,211	44,784
プーラン族	19,204	27,105	33,323
イ族	5,487	22,391	33,467
回族	1,188	2,332	2,695
ワ族	2,660	1,524	1,691
ペー族	599	1,294	2,491
チワン族		134	238
ミャオ族	33	101	281
ヤオ族	7,309	10,958	14,772
チンポー族	35	56	90
チノー族	5,840	11,546	16,535
リス族		38	82
ナシ族	3	24	24
モンゴル族	1	26	20
トン族		19	29
リー族		9	16
満族		12	13
プイ族	6	36	28
トゥチャ族			25
その他	16,728	10,751	14,748
計	367,895	647,659	793,648

出所：云南省勐腊县志编纂委员会［1994］，云南省勐海县志编纂委员会［1997］，云南省景洪县志编纂委员会［2000］，の民族別人口統計より合算して作成。
注：数字二桁未満の民族についてはその他とした。

1）西双版納地区への漢族の流入とその社会的影響について調査をもとに論じた論考に菅野［1995］があるが，そこでは，1990年の時点で漢族は25.2%，タイ族が33.9%，その他の少数民族が40.7%という数字があげられている。もっとも新しい数字としては，2002年刊行の『西双版納州誌』があるが，未入手である。

多様性を有する森ではない。それもそのはず，景洪飛行場は，西双版納に作られた最初のゴム農場，景洪農場の真ん中に作られているのである。しかし，この景観は農場の中だけにとどまらない。植えられている作物は，パイナップルであったり，陸稲やとうもろこしであったりとさまざまであるが，現在の西双版納の山々は，中国の他の地域と同様に，山頂まで徹底的に利用されている畑となっている。国が指定した自然保護区などの限られた地域を除いて，熱帯の原生林はほぼ完全に消滅しつくした，といってもよい。

これほどまでに大きな変化は，西双版納の歴史上でかつてなかった。しかもそれは，わずか50年の間におきたことである。その大きなきっかけをつくり，最も大きな変化を与えたものの一つがこの地ではゴムの栽培である。1947年にタイの華僑が，はじめてこの地に試験用のゴムの苗を持ちこむまで，この地にゴムは存在しなかった。[2] その後1957年に本格的に国策としてこの地でゴム栽培が始められ，多くの農場が建設されて以来，まったくの外来作物であるこの新作物は，この地の人々の生活と環境を大きく変えることとなった。

本稿では，1950年代以降この地にもたらされたゴムとそれとともに流入した漢族の移民が，この西双版納の盆地世界をどのように変えていったのか，在来の諸民族はどのような影響を受けたのか，それによって盆地の住み分けや民族間の関係はどのように変化したのか，という一連の過程について，農場誌などの資料および雲南大学人類学系尹紹亭教授との共同研究をもとに描き出してみたい。

I　ゴム園の開拓と漢族の流入

現在，西双版納には景洪，東風，勐腊，勐捧，橄欖壩，勐養，勐満，勐醒など８つのゴム農園がある。1950年代以降，軍需物資，工業原料としてのゴムの国内生産という国家的使命のもとに，海南島と西双版納において次々と農場が建設された。その後，ゴム生産は順調に展開し，1990年代初めには中国国内で生産されるゴムの三分の二以上がここ西双版納で生産されるに至っている［白坂 1997: 367］。また，1980年代以降，山林の所有権の確定，生産責任制の確定，自留山の確定という三つを確定するいわゆる「三定政策」が行われてからは，国営ゴム農園以外の民営ゴム園が急速に広がり，国営農場100万畝（１畝は6.67アール，約66,700ヘクタール）に対して，それを上回る110万畝（73,370ヘクタール）に達し，それは現在も拡大傾向にある［李 2001: 31］。

2）白坂によれば中国にはじめにゴムが持ち込まれたのは1904年であるということであるが，実質的な栽培には至っていない［白坂 1997: 367］。

三定政策については，地域によって実施状況が異なるが，尹紹亭の説明にしたがって，およその経緯を概観したい［ダニエルス・渡辺 1994: 418］。まず，1978年に農地の請負制が全国的に進行すると，山地の開発への規制がゆるみ，森林の耕地化が急速に進行した。その情況はあまりにも急激であったため，政府林業部門は森林の無制限の利用と開発に歯止めをかけるため，使用可能な森林と不可能な森林を確定した。

使用不可の森林は「国有林」や「自然保護区」に指定し，焼畑や伐採が禁じられることとなった。それ以外の土地は「集体林」（集団や村の共有林）と農民個人に割り当てられた「自留山」に区分された。この結果，これまで明らかでなかった山地の使用区分と所有権が明確になり，その区画に沿って土地利用が行われるようになった。従来焼畑を行ってきた山地民族には，一人当たり平均３畝の土地が与えられ，それを７年間の休閑でまわしてゆくこととなったため，結果として21畝が農民に分け与えられることとなった。土地の分け方や大きさは，それぞれの民族のそれまでの焼畑形態の違いや，その地域の人口密集度などによってさまざまであるが，この一連の政策により，多くの民族が，移動や焼畑の放棄を余儀なくされた。また，70年代以来，山頂近くの山地民族の低地への移村，定住が行われた結果，平地周辺の土地利用状況が逼迫し，後に述べるような境界線をめぐるトラブルなども起きやすくなっていた。

こうした一連の変化を経て西双版納の森林面積は，1953年以前の65％から，30年後の1980年代には20％台に落ち込んだ［西双版纳州政府接待处 1993: 129］。その後，2000年以降になって森林面積は40％台に回復したと公表されているが，それは天然林のみではなく，ゴム園などの経済林や人工林を含んだ数値である，と尹紹亭は指摘する。また，1960年代から1980年代の間に少なくとも66万ヘクタールの森林が伐採されたとする数字もある［吉野 1993: 162］。そのうち，ゴム園自体は，2000年現在でも国有農場，私有農園あわせて15万ヘクタールほどであり，数字の上では圧倒的とはいえない。しかしながら，ゴム園の開発を引き金とした森林開発，人口増加，民族の居住形態の変化などが，周辺の土地利用に大きな影響を与えていることは明らかである。そこでまず，本章では，ゴム園の開発に伴う外地からの人口流入の過程について概観してみたい。

１．農場開発と人口の流入

西双版納でゴムの試験栽培に成功したのは，1948年タイ華僑が約２万株の苗をビルマから陸路で輸送し，現在の橄欖壩の農民に委嘱して300畝あまりの土地にゴムを植えたのが最初であると言われている。1949年以降，華僑がタイに帰国したことなどで頓挫するが，この成功は西双版納でゴムの生育が可能であるという事実を提供し，その後のゴム栽培の展開に大きく影響を及ぼすこととなった。1956年農墾部は56名の幹部を海南島と広東省から送り込み，初の国営ゴム農場を設立した。現地で90人あまりの労働者を募り，景洪農場の前身となる二つ

の生産隊を作ったのである。当時の様子を農場誌は以下のように記述している。

> 30年前の景洪周辺は，何十キロにもわたる原生林に覆われており，一旦足を踏み入れると，太陽の光も届かず，蔓や棘をもった草木が生い茂り，竹や木々に覆われて，あたかも底知れない神秘的な緑の世界に迷い込むかのようであった。夜になると，獣たちの声があたりに響きわたり，身の毛がよだつ思いがする。朝になると，あたりは深い霧に覆われて，これこそまさに“瘴気”の満つる土地であると，思い知らされる。［中略］一行149人は，にわか作りの小屋を２棟建て，とりあえず雨露をしのぎ，来る日も来る日も，鉈や鋤をふるって，原生林と戦った。［国营景洪农场场史征集办公室 1986: 3］

こうして，農場建設の第一歩が踏み出された。ちょうどその頃，朝鮮戦争の終結による解放軍兵士の帰還問題が浮上していたことや，ビルマなど周辺諸国との国境の辺防強化という課題，それに加えて中ソ関係悪化という国際情勢から，ゴムの戦略的調達が必須となっていたこと，などを受けて農場建設は急ピッチで進められ，退役軍人らが送り込まれて，1959年には3,000人を越えるまでになった。1958年には，東方農場の前身，国営大勐龍農場が設立された。このように，当初の開拓は省の農墾総局などが主体となって，省や思茅地区の幹部および退役軍人が送り込まれるという形態，つまり伝統的な「屯墾戍辺」という形で進められていた。この頃すでに昆明などからも「社会青年」と呼ばれる下放青年が，少数ではあるが送り込まれていた。省の農墾総局はさらに，人口が多く土地が不足している他省から農業労働力を調達するべく，労働力の移民政策を進めた。最初に選ばれたのが湖南省の醴陵県という江西省との省境にある県で，中央の斡旋で，雲南省と湖南省が協議し，1,000人を越える家族ぐるみの移住が行われた。当時はしかし「移民」とは呼ばれず，辺境支援「支辺」つまり辺境支援というスローガンのもとに，生産大隊ごとに，一定の人数を選び出し，「支辺光栄」という赤いバッジをつけて，この地に送られてきたという。最初の呼びかけは，実に10日ほどで移住者を選出し，現地に送り込む，という緊迫したものであった。この移民政策に応じて東方農場に来た農民は当時を振り返って次のように語っている。

> 時間はとても逼迫していた。確か10日余りだったと思う。1959年12月上旬に動員が始まり，12月20日にはもう我々は大隊（村）を離れ，12月21日には醴陵を離れていた。……当時の宣伝は，「雲南西双版納に行って辺境を支援し，国家第二のゴム園を建設しよう，毛主席の呼びかけだ。現地には，家も家具もすべて用意されている！」というものであったが，実際に行ってみると何もなかった。……当時，移民という言葉は使われなかったが，もし移民と知っていたら皆しり込みしていただろう。辺境支援「支辺」ということだったので，皆一定の期間を想定していた。それであとになって我々の故郷から慰問団がやってきた時に，「一体いつまで辺境支援するんだ？一生，支援し

ろというのか？」と詰め寄ったりして，慰問団を困らせたことがあった。[3]［和: 2001］

この農民は，祖母，父母，兄弟姉妹４人と妻と子供一人（妻は二人目を妊娠中であった）とともに翌１月５日に東方農場にやってきた。[4] その後祖母，父母，妻ともに他界し，３番目の娘の一家３人が故郷の醴陵県に住んでいるほかは，兄弟の家族，娘息子の家族あわせて29人が現在も雲南にいる。ただ，先の下放幹部を含めて，生活の厳しさと気候に耐えられず，逃げ帰ったものも少なからずいたという。それについて，1960年に退役兵として東方農場に配属された農場幹部は以下のように振り返る。

> 1960年に私がここに来た時，1958年に来た退役軍人や下放幹部はもう一人もいなくなっていた。その一部分は地元の地方政府に転職していたが，大部分，特に北方から来た人は皆，故郷に帰ってしまっていて，一人も残っていなかった。……我々と一緒に来たものも，逃げ帰ったものの方が多かった。毎日，去年のとうもろこしを食べるのだが，気候が暑いため，一年置くと虫がわく。日干しにしてから調理するものもいたが，面倒くさがって，そのまま煮て食べたものもいた。一緒に来た74人のうち半分が帰ってしまった。第三生産隊はすべて，湖南人であったが，全員帰ってしまった。第六生産隊も湖南人ですべて帰ってしまったので，ゴム園の管理はめちゃくちゃになっていた。［同上書: 22］

農場開発の初期において労働力，幹部などの人材確保がいかに困難なものであったかがここから窺える。時はあたかも大躍進の真只中で，農場では日々「革命的精神」にのっとって，「荒地」の開墾，棚田の造成が昼夜を分かたず行われた。特に1959年の１月から４月は，「棚田をつくり，深く耕し，任務を達成しなければ山を降りない」というスローガンのもとに，各生産隊が争って棚田の造成に狂奔した。当時，食べるものも十分にない中で，山芋やたけのこ，竹根菌などを煮て「革命菜」と称して食べていた。過重な労働と栄養不良で，病気や過労による犠牲者が出たことが記録されているが［国营景洪农场场史征集办公室 1986: 10］，当時全国的に飢餓が蔓延していた状況を鑑みると，それほど深刻ではなかったというべきだろう。おそらく熱帯の気候と周辺の豊かな植生に支えられていたと考えられる。当時の労働の熱狂ぶりについて，ある農場誌は次のように記している。

3）これは，我々の中国側の共同調査者で，現在雲南省社会科学院（当時，雲南大学大学院生）の和渊が，東方農場での調査の際に聞き取りを行った内容による。同氏の調査の内容は，雲南大学に提出された修士論文［2001］としてまとめられている。和渊の調査内容の一部は，共同調査の成果として雲南教育出版社から出版予定の本に収録される予定である。

4）数日後の１月８日に到着したものを含めると，この時，醴陵県から東方農場に来た人々は2,000人に上る。

大躍進運動の頃，「尖兵連」[5] は，数多くの奇蹟を生み出した。例えば，孫という人物は80×70×60センチのゴムを植えるための穴を一日に100個も掘り，35立方メートルもの土を掘り出した。コーヒーを植えたあと40×50×60センチの穴に土を戻す作業などは，孫は1,047個，125立方メートルもの土を埋め戻した。これほど大量の労働は今日には考えられないものである。「尖兵連」はしばしば，夜戦，苦戦もものともせず，最長70日間山から降りてこなかったこともあった。彼らのスローガンは「山は戦場である，軽い病気や怪我は構わない。かつて敵と戦った日々の精神を思い起こして生産任務を達成しよう」であった。

この尖兵連の隊員からも若い命が犠牲となった。その隊員は鋭い葦の葉で深い傷を負って血が流れているにもかかわらず，６時まで仕事をやめず，作業を終えた時には高熱で意識もうろうとなっていた。医者に診て貰ったが，十分な薬がなく，翌日，それでも生産に向かおうとしている姿を見た仲間が，慌てて州の病院に送り込んだが，もはや身体は冷たくなっており，帰らぬ人となっていた。［景洪农场发展史编委会 2001: 12］

これらは，全国的な現象であったとはいえ，農場の初期の開発が，戦場を思わせる自己犠牲と熱狂的精神に彩られたものであったことがわかる。

この頃，景洪農場では人口が１年間で倍増し，農場労働者の食糧調達や子弟のための学校の設立なども急務となっていた。また，中央政府も農場建設を重視し，1961年には周恩来が，1963年には当時農墾部部長であった王震が視察に訪れている。また，四川省などからも「志願者」が次々とやってきていたが，文化大革命が始まると，各地からの下放青年で，人口は本格的に増え始めた。西双版納の農場人口は，1965年の25,000人から10年後の76年には88,000人となっており，その大半が北京，上海，重慶，昆明からの下放青年であった。後に中国映画の第五世代として名を知られる映画監督陳凱歌もこの頃，景洪農場に下放されたものの一人である。西双版納全体に送り込まれた「知青」の数とその出身地別の内訳は図１のとおりである。

ここに含まれていないが，昆明から下放されてきた知識青年が1966年から68年の間に６万人いたと公式的には報じられている。ただ，1960年初頭からのベトナム戦争時期に軍隊に送られた数字を含めると，実際には20万人から30万人に上っていたのではないかと，下放青年であった省の統計局の調査員は見積もる［Shapiro 2001: 174］。また，当初帰還兵などによる「支辺」として農場に来たものの多くが男性であったため，「社青」つまり「社会青年」として，昆明などから送られてきた場合は上層部が意図的に女性を多く送り込んだと言われている。その後1970年代前半には農場自身も「兵団」組織へと改組し，農場の生産隊はそのまま人民解放軍生産建設兵団の下部組織となるなど，文革の影響を色濃く反映するようになる［国营景洪

5）当時，景洪農場のある生産隊が，奇跡的な偉業を成し遂げたことから，後にこの名前で呼ばれるようになったもの。

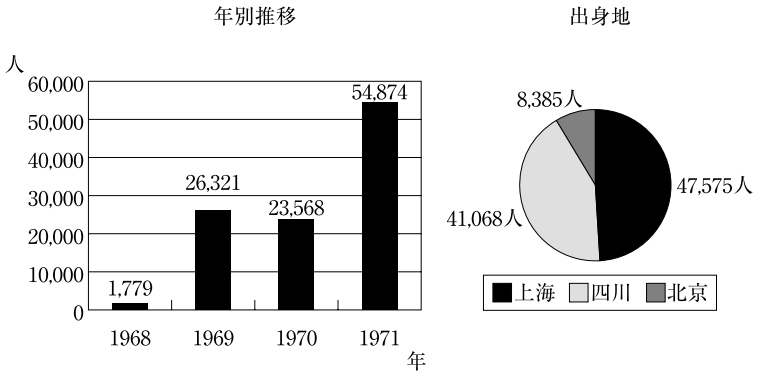


図1　下放青年の年別推移と出身地

出所：Shapiro［2001: 174］より作成。

农场场史征集办公室 1986: 27］。その後，下放青年は約10年余り，この地にとどまり，「大寨に学ぶ」のスローガンのもとに，木を伐採し，棚田を造成し，ゴムを植え，食糧を生産した。知識青年の中には，直接農場に送り込まれてきたものもいれば，タイ族など周辺の村に下放されたものもいた。地元景洪の子弟で，少数民族の村に下放されたものは，村に入って最初の仕事は山菜採りであったといい，タイ語なども習得するようになっていた。[6] 文化大革命期の政治的熱狂によって植生が破壊されたプロセスについては，映画や文学作品などで記述されることはあっても，[7] 実証研究として仔細に論じたものは多くは見られない。[8]

こうした知識青年の都市への帰還が1978年頃から始まり，ほとんどの知識青年が帰還した

6）今回我々の中国側共同調査者の一人で，本文でもたびたび引用している論文の著者李晓凝は西双版納電視台で長年記者として働いているが，10代の頃に，東方農場周辺のタイ族の村で数年間下放した経験を持ち，今回我々の調査に同行するなかで，20年ぶりに村を訪れて，村人たちと再会を果たした。

7）景洪農場に下放された陳凱歌による映画『子供達の王様』（原題『孩子王』）は同じ時期に，同じ景洪農場に下放された作家阿城の同名の原作をもとに作られた作品で，火を入れられた山の光景などが鮮烈に映し出されている。また陳凱歌自身による下放時代の回顧録『私の紅衛兵時代』は，本稿では用いなかったが，農場開拓による森の開拓の様子が詳細に語られている貴重な記録の一つとして参照の価値がある［陳 1990: 176–210］。ことに，「毒虫と伐採の日々」や「野焼きの光景」「原始の森の死」などは，伐採で手が血まみれになった様子や，下放青年がけがや発疹，発熱に悩まされ続けたこと，豊かな森の世界が次々に姿を消してゆく様子などが，描き出されている。また，阿城による小説『樹王』は，４日間切っても切り倒せなかった巨木がついに倒れたこと，それによって生じた精神的打撃について描いており，いずれもこの雲南での経験を直接下地にして書かれた作品である［阿城 1997］。ここからも，下放青年にとっての雲南経験がその後の文学作品にも影響を与えていることがわかる。また，当時多くの人材が送り込まれていたことについて，現在の景洪農場長は，もしあの時の下放青年が帰還していなかったら，我々は現在決してこの椅子に座るようなことはなかっただろう，と回顧している。

8）大規模な政治的変動や政策変化が森林に与えた影響については阿部［1997］が大理周辺の中標高盆地を事例として論じている。しかしながら，ここにおいても，用いられているのは主として他地域のものを含めた回顧録で，実証過程としては十分ではない。

写真1　都市から列車で送り込まれる知識青年

写真2　斜面に棚田を作る

写真3　下放青年の開墾隊

写真4　人力に加えて重機が投入された

出所：写真1–4［东风农场志稿编纂委员会: 1988］

ため，一時は農場の労働者が三分の一近くにまでなるという事態が発生した。これに伴い，新たに労働力を補填する作業が必要となったわけだが，この際には同じ省の少し北の思茅や普洱，景東，景谷，墨江などから労働者が集められた［杨 2001: 6］。

また，80年代に入ると，農場周辺の少数民族の村落が「民営ゴム」生産を始めた。これに伴い，かつて農場で労働経験のある湖南省出身者などが，ゴム生産の専門技能をもったものとして，あらためてタイ族の村などで雇われる，いわば「民工」による出稼ぎというパターンが見られるようになった。[9)]

以上が，この地域へのゴム園を中心とする漢族の流入の大まかな流れを，主として漢族の側

9）80年代以降，西双版納における漢族の出稼ぎ労働者の与える社会的影響については，菅野［1995］に詳しい。

から見たものである。では，次にこのように政策的にこの地に送り込まれてきた人々が，時に兵団組織として，農場を開拓し，森林を伐採していった様子をさらに詳しく見てゆきたい。

２．野生との戦い――農場開拓史

先にも紹介したように，農場誌や農場建設に関わった人々の回顧録には，1950年代から60年代にかけて，原生林に立ち向かい，農場の基礎の基礎を築き上げた人々の苦労を思い起こさせる記述が多く残されている。そうした記述から，半世紀前のこの地域での環境との戦いがどんなものであったか，農場開拓に入った人々が戦った「自然」とはどんなものであったのかを，窺い知ることができる。

まず，農場建設の初期に関わった人々の回顧録から見てみよう。これは景洪の市街をわずかに外れたところに位置する景洪農場の開拓当時の様子を描いたものである。現在，観光用の景洪市街地図にも記載され，市の目抜き通りから歩いて20分程の距離にある場所の，50年前の情景である。[10)]

> 当時原生林ではサルが群れをなして生息しており，毎日木を切るために山に登るとまず，度胸のある男達がサルを追い払う。そうしないと，サルがからかいに来るからである。山には草木が生い茂り，ヒルがしょっちゅう首もとや体にまとわりついてきた。草葺の家では蛇がしばしば姿を現し，入り口のそばにとぐろを巻いていた。夜中に布団の中にもぐりこんでくることもあるくらいだった。豹は山で遠吠えをし，我々を恐怖に陥れた。ある時ブタ小屋で豹が暴れているのを耳にし，飛び出して豹と戦ったものがいたが，取っ組み合いになって，重症を負った。［景洪农场发展史编委会　2001: 5］

こうした中，一カ月あまりかかって，農場本部の宿舎，執務室などを，竹や茅葺で完成させた。生活物資は何もなく，すべて県城（当時の景洪県城）から馬車で流沙河のほとりまで運び，そこから肩に担いで運んだ。また，実際にゴム園の開拓にあたっては，当初，住む家などなく，タイ族などの集落に軒を借りたり，野宿をすることも多かった。

以下は，景洪農場の南に隣接する東方農場の開拓のために1958年春に昆明から部隊を率いて東方農場にやってきた老幹部の回顧録である。

> 河を越えた時にはもう深夜になっていたので，曼別村の村人に迷惑をかけるわけにもゆかない。我々270名は森の周辺や芭蕉の木の下で野宿することにした。一日の疲れはあったが，輝く星の下，静かで忘れがたい夜を過ごした。まだ，眠りについていない

10）筆者が聞き取りを行った景洪農場の退職労働者で56年に農場に来た初期の労働者は，当時景洪は現在「老街」と呼ばれる通りに県政府があったのと，もとフランス人の建てた教会であった建物が，「武装部」と新聞社として用いられていたのが唯一の瓦屋根の建物であったといっている。

同志もいるのか，時折笑い声が聞こえてきたり，戦争の頃夜営した思い出を語るものもいた。また未来について語るものもいて，密林の中からは鹿の声が聞こえてきたり，赤ん坊の声が聞こえてきたりした。夜がまだ明けやらぬうちから，タイ族の村の人たちが米を搗くトントンという音が聞こえ，ニワトリの鳴き声で目を覚ます者もいた。森の中の鳥もさえずり始め，我々も起き出して深い霧の中，労働を開始する。霧は長く続いて，太陽はなかなか仰ぎ見ることができなかった。遠くの山々がベールをまとった少女のように，うっすらと輪郭を現す時になると，芭蕉の木の葉には夜露が玉となって転がり，大青の木の上の霧も，水滴となって地面に落ち始め，我々の蚊帳もすっかり濡れてしまうが，仲間はそんなことには構わず，開拓者の気概に酔いしれていた。［国营东风农场　1994: 15］

また，58年４月には，農場幹部の妻が，まだ住む家もないなか，森の大青の木の下で，農場初の赤ちゃんを出産したと東方農場誌の大事記に記載されている［东风农场志稿编纂委员会 1988: 37］。

このほか，開拓の途中，ヒョウや大蛇の犠牲となった例も，数多く記されている。

我々はしょっちゅう野生動物の襲撃を受けた。ある時，農場の労働者が大きな竹の群生を伐採していたら，背後の草むらから一頭のヒョウが飛び出してきて彼の頭部と頚部めがけて喰らいついてきた。助けを呼ぶ声を聞きつけて，仲間がいっせいにヒョウになぐりかかり，この労働者は一命をとりとめた。また，ある時，山に火を入れていたら，巨大なヘビが突然火の中に立ち現れた。人間をゆうに超える大きさで，口を大きく開いて，のどを鳴らして，20センチもあるかという長い舌をちらつかせた。おそらく火に焼かれて焙り出されたのであろう。突然襲いかかってきた。とっさに，岩の背後に隠れたが，ヘビは勢いよく私の頭上に襲い掛かってくる。目の前が真っ黒になったとき，仲間が駆けつけて，ヘビに向かって鉈や刃物で切りつけた。ヘビはしばらく地面をのたうっていたが，そのうち動けなくなった。この7～80キロもあるヘビを我々農場労働者は一週間かけて食べ，さらにヘビ油までとることができた。［景洪农场发展史编委会　2001: 7］

これらは，皆運良く助かった事例であるが，命を落とした例もある。ゴム農場ではないが，やはり早期に開拓が始まった黎明農場の『回憶録』には，1962年の春，上海から来た若い獣医が，仕掛けたワナを振り切って逃げたヒョウが再び農場の家畜を荒らしに来るのを恐れて，３人で連れ立ってヒョウ退治に出かけ，全身を噛まれて死んだとある［黎明农工商联合公司党委场史编写办公室 1986: 124］。

こうした状況の下，50年代から60年代までは，毎年数百頭もの家畜や穀物が，猛獣や鼠の被害にあっていたため，毎年各地で狩猟隊を組織して，野獣の撲滅にあたったと景洪県誌には記されている。その数は次のようなものである。

1954年　全県で「狩猟隊」が討ち取った野獣4,645頭。
1955年　全県で「狩猟隊」が討ち取った野獣5,039頭，ネズミ11,246匹。
1956年　景洪で組織された「狩猟隊」は131。3,600頭の野獣と6,300匹のネズミを撲滅。
［景洪县地方志编纂委员会　2000: 69］

ここでいう野獣とは，ヒョウやトラに加えて，シカやゾウ，野牛なども含んでおり，1980年代に入ってはじめて，ゾウを保護するために，住民への被害を政府が補償したという記述が見られるようになるが，それまでの20年間，人間の生活空間の拡大に伴って，その数を激減させることとなった。このほかクジャクやイノシシなどもかつては多く生息していた。

森林の開発も，革命的熱意を示すために，より多くの木を競い合って伐採するという時代が続いた。当時の労働の様子を示すものは，「朝３時には起床して森に向かい，毎日木を切り倒した。一日に１畝（6.67アール）を目標としていた。伐採して残ったものは，燃やした。毎日７時から８時頃まで伐採し，公共食堂から送られてくるお粥で朝食をとった。毛主席の『老三篇』を学習し，資本主義と修正主義と戦うことを誓い，昼食までまた仕事にかかり，午後は６時までもっとも長い時間仕事をした。身体を洗って，食事をとったあと，さらに２時間の批判大会が開かれた。一カ月に20キロの米しかなく，それでは足りず，家族から「糧票」（配給チケット）を送ってもらうものもいたが，それでも足りなかった」と記している。これは60年代，16, 7歳で農場に下放された青年の記録である［Shapiro 2001: 176］。筆者が聞き取りをした農場労働者も，毎日懸命に木を切っていたと話す。特に木の根を掘り起こすのがもっとも重労働だったという。当時木のほかに，周囲数十メートルをゆうに越えるような竹の群生が各所にあり，[11] その伐採は負傷者も多く，危険な作業であったという。伐採した竹は，次々と川を通じて流し，下流に集めた（写真５参照）。さらに，農場の開拓だけでなく，建設用材として，専門に「伐木隊」というものも組織されていたようである。

写真5　伐材した竹を河で運ぶ
出所：［东风农场志稿编纂委员会 1988］

1963年，増加する建築用材の需要にこたえるために，林業局が各農場に木材伐採地を指定したが，東方農場に割り当てられたのは農場から150キロ

11）聞き取りによると，８畝つまり５平方キロにもわたる竹の群生も存在したという。また，もっとも危険度の高かったのがこの竹の伐採作業であったという。

余り北に離れた大渡崗付近の原生林であった。送り込まれたのは20組の夫婦と４名の単身者，それに３人の老人と12人の子供達で，９年の間伐採と製材に従事した。大渡崗まで車で送られて，そこから13キロ余り歩いて現場に到着した。あたり一帯は手付かずの森林で，松，栗，椿，金木犀などが群生しており，シジュウガラが鳴き，リスやサルが木の上を飛び回っていたという［国营东风农场　1994: 299］。この「伐木隊」は，１畝ごとに３から５本の「母樹」を残すなど林業局の伐採規定に従い，毎年700から800立方メートルの木材の生産を達成した。

このほか，野生との戦いで言うならば，疾病との戦いもそのうちの一つであった。特に，マラリアやチフスといった伝染病は，蚊やネズミが多く高温多湿のこの地域においては，常に人々を脅かす存在であった。特に60年代初頭の湖南からの労働者などに，多くの患者が現れ，予防措置を講ずる必要性が高まった［东风农场志稿编纂委员会　1988: 463］。1960年東方農場の2,000名余りの労働者のうち，マラリアに似た症状を訴えるものが487人にのぼり，1958年から1964年にかけて農場の衛生院で治療をする病人が年間平均120人であった。しかも悪性疾患が主で，死亡率は４～６％であった［同上書: 465］。天然痘については，民国期にこの地域でしばしば流行していたとあるが，タイ族の村では，隔離措置がとられなかったため，伝染性も高かった。それに対してハニ族は，患者を山奥深くに隔離し，食事も長い竹の棒で届けるなど接触を許さなかったため，比較的抑制されていたという［景洪县地方志编纂委员会　2000: 989］この地域に最初に種痘を広めたのは1913年に景洪（当時の車里）を訪れたアメリカ人宣教師であったが，その後一般に普及するようになるのは1950年代以降で，1980年代には発症が見られなくなった。赤痢は1960年代から70年代にかけて，人口の増大もあって，うなぎのぼりに増えた。年間の発病率は県下で1964年に263.93/万（3,960例），1966年に379.17/万（6,042例），1971年に373.99/万（8,836例）となった。人口の増大により人数は増えつづけているが，衛生の改善等により，発病率は下がる傾向にある［同上書: 991］。

医療の普及，防疫面での向上という点で，病院や衛生院を持つ農場は，積極的な意味を果たしたと言われている。事実，ハエや蚊，ネズミなどの駆除，予防活動などに効果的な活動を展開し，疾病予防などにも中核的な存在となっていたが，人口流入により疾病を増大させるという側面も持ち合わせていた。いずれにせよ「自然の克服」のなかには，こうした疾病との戦いがあり，西双版納を熱帯の瘴気に満ちた土地から，「近代」的な空間へと改編する努力が重ねられていた。

では次に，ある盆地をとりあげて，農場の建設が，具体的に一つの盆地世界をどのように変えていったかという点について，見てゆきたい。

II　ゴムが変えた盆地世界――勐龍を事例として

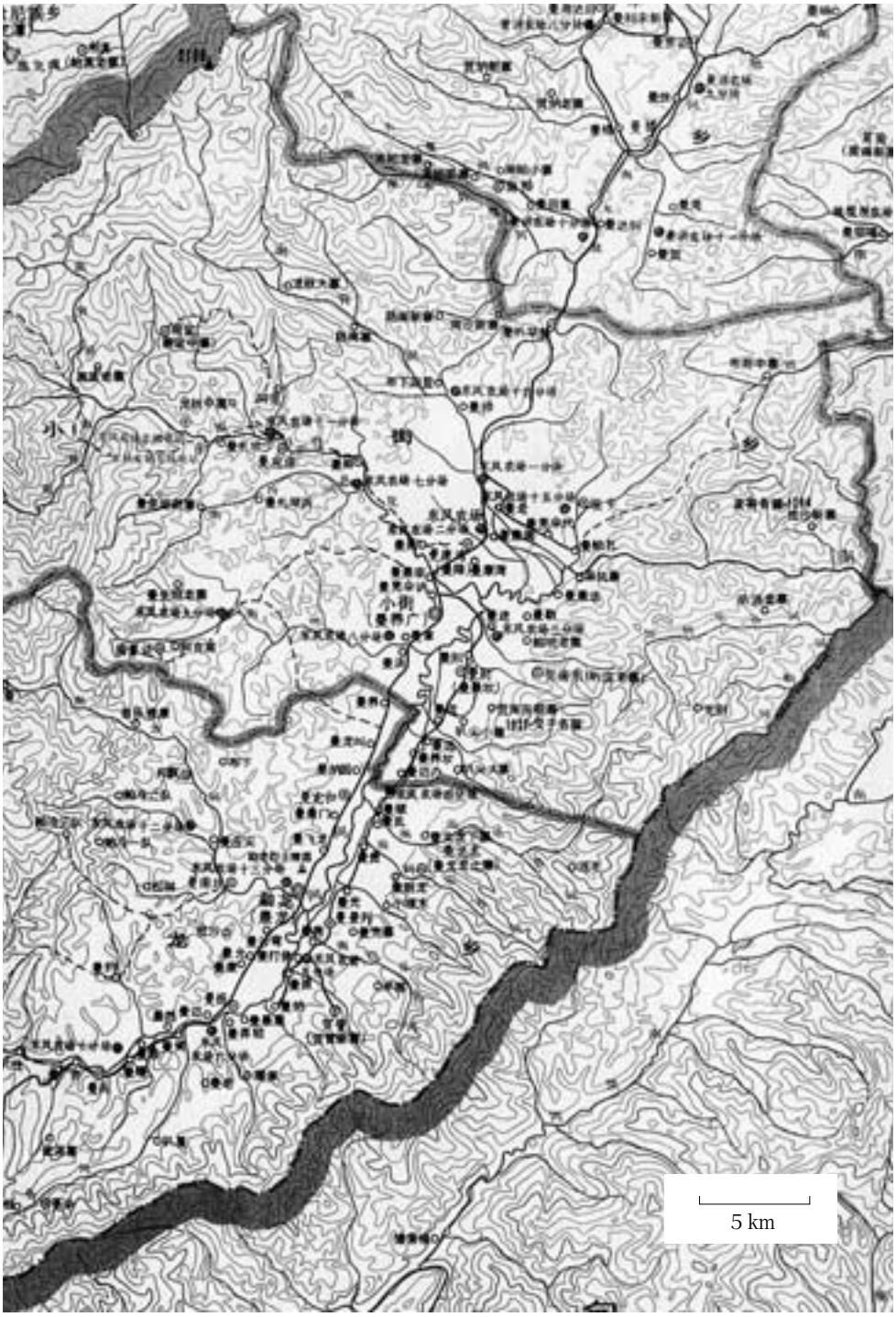
ここで事例として取り上げるのは東方農場の本部から少し南に位置する小街郷という地域で，縦に長く伸びる勐龍の盆地とその両側に広がる山を横に切り取ったような地域である（地図２参照）。

まず，この地域は勐龍盆地の平野部[12]が，メコン河の支流である南阿河に沿って広がり，その周辺に標高600メートルから800メートルの丘陵地帯が広がっている。そしてその両側に標高800メートルから1,000メートルを越える山々が連なっており[13]，その山の東側と南側がミャンマーと境を接するという，もっとも国境に近い盆地の一つである。現在，景洪から車でここに行くには，途中，限備や景洪農場のいくつかの分場を通り抜けて，約１時間ほどの道のりである。ここはかつて，勐龍に属しており，ミャンマー国境により近い勐龍鎮がこの盆地の中心地であった。人民公社時代には1969年に勐龍人民公社が設立されるが，1975年に盆地北部の７つの大隊で小街公社が設立され，1988年に小街郷となった［同上書: 85］。

１．勐龍盆地における３つの中心地の形成

地図３は，現在の勐龍における３つの中心地の位置関係を示したものである。西双版納の伝統的なムアン制度の下では一つのムアンには，政府の所在地の村に一つの「街」つまり，市の立つ場所が一カ所のみ許されていたため，この勐龍においても，政府所在地である景龍（現在の勐龍）に隣接する嘎龍にのみ市が立っていた。民国期にはそこは，嘎洒，嘎蘭，橄欖壩などとともに，西双版納では有数の市であったようだ［同上書: 431］。しかしながら，勐龍盆地全体を勐龍一カ所でまかなうには不都合もあった。それは主として南阿河に合流する他の２つの河川の上流に住む人々が，山を降りてさらに10キロ近くも歩かなければならないということであった。しかもそれは南阿河の上流に向かってである。西双版納の伝統的なムアン権力のありようについて長谷川はメコン支流の水系に沿って中小ムアンが形成され，メコン本流沿いに位置し，王都の置かれたツェンフンに束ねられていると論じたが［長谷川 1991: 385］，その意味でいくと河川の合流地点は，経済的に重要な意味を持ち，それゆえに，政治的にも重要な拠点となり得る。勐龍盆地において，第二の市が設けられ，しかもそれが盆地におけるもうひとつの河川の合流地点であることは，そのことに照らしても，容易に理解できる。勐龍より下流に位置し，２つの河川を束ねる小街付近の方が，優位に立ち得る危険性を当時のムアン権力が意識していたことは，つけられた地名にも現れている［华 2000: 33］。[14]「小街」は

12）もっとも標高の低い所で575メートルである［景洪县地方志编纂委员会 2000: 85］。
13）標高がもっとも高いのは，郷西部の路南山の主峰，南勒各梅で2,196.6メートルである［景洪县地方志编纂委员会 2000: 85］。



地図2　勐龍盆地

地図3　勐龍盆地とその周辺の中心地

もともとタイ語で“小さな市”を意味する地名を漢語化したもので，この市が決して勐龍の市の規模を超えることのないようにつけられたものであるといい，また同時に勐龍の市を「大街」と呼ぶようにしたという。

その後，1975年に小街人民公社が成立した際に，政府機能はかつての小街の市があった曼亮傘から約１キロ程南の曼養広に建てられ，かつての「小街」は「老街」と呼ばれ，新しい政府所在地は「新街」と呼ばれるようになった［和 2001: 49］。しかし，人々にとっての「小街」は依然として旧来の市の場所であったため，新街には政府機関の建物と小さな飲食店が３軒ほど並んでいるだけで，朝の８時の始業時間をすぎると，閑散としている。また小街に人民公社が置かれたその年に，それまで南の勐龍に置かれていた東方農場の本部が現在の位置，すなわち，小街より北に２キロほど離れたところに移設されたため，[15] 多くの店舗や飲食店，学校，

14）華思文（本名：Steven Laurits Watkins）は雲南大学に2000年に提出した博士論文［华 2000］の中で，政治空間としてのムアンが，地理的，空間的，意味的にどのように構成されていたかを，歴史的にまた民族学的に記述するなかで，この勐龍の事例に言及している。ただ，これについては高の『西双版纳傣族的历史与文化』［1992］によるとしているものの，同書には該当個所は見あたらず，小街の市がいつ頃設置されたものかはわからない。ただ，華の同上論文では，1940年代から50年代初期にかけて西双版納で調査を行ったタイ人の記録を引用し，1940年代から50年代の時点で一つのムアンに複数の市が立つといった現象はまだ普遍的ではなく，一般には一ムアンに一つの市，といった状況が維持されていたと書かれている（Bonchuay Siisawat『傣勐西双版納』上冊，バンコク，1955）としている。

15）農場本部の位置については，以下のような変遷をたどっていた。57年に初めて農場が設立されたのは現在の本部の近く（後に一分場となる）で，大勐龍農場と名づけられた。翌58年には勐龍の近くの曼景列に前哨農場（後の二分場）が，また同年，現在の三分場の位置に東方農場が，それぞれ設立された。1963年になって，３つの農場が正式に合併し，現在の東方農場が設立されたが，その際 ↗

郵便局，劇場，招待所などが建ち並び，実質的な中心地はこの農場本部周辺の街路となった。そのため，かつての「老街」の市も徐々にその機能を奪われ，現在では，小街郷政府を農場に隣接する公路沿いに移転する計画が進められ，まもなく移転が実施されることになっている。[16)]

こうして，ここ勐龍盆地では農場の本部周辺が，かつての中心地，勐龍を凌駕して，実質的な盆地の中心地機能を果たすようになってきた。それは，この地域における国営ゴム農場が，今や地方政府をはるかに上まわる予算規模を持ち，学校，発電，医療機関などを提供するなど，実質的に地方政府的な役割を果たしていることとも無関係ではない。小街郷政府の移転はまさに，現在，農場本部が盆地の中心地として果たしている吸引力の大きさを示しているといえよう。

では，ここで，現在の農場本部周辺の街並についてもう少し詳しく見てゆきたい。「場部」ないしは「総部」と呼ばれる農場本部は，大きな金字で彩られた看板をかけた入り口の奥の広い敷地の中に建つ，このあたりではあまり見かけることのない５階建ての鉄筋コンクリートの建物である（写真６参照）。隣の敷地には招待所があり，その少し手前には３階建ての郵便局がある。１キロにも満たない街路の両側には，雑貨店，飲食店，農機具や自動車の修理店，カセットショップ，理髪店，写真店，裁縫店などが建ち並び，最近では携帯電話の販売店も出現している。また，こうした常設店舗前の車道の両側には，主にタイ族の女性がパラソルを立てて，タケノコや野菜，米などを売る露天を並べている。さらにその手前には客引きのミニタクシー（そのほとんどがバイクの後ろに客座をとりつけた「三輪」形式のもの）がたむろし，その間を車と人がすりぬけてゆく。中国の田舎の街のどこにでも見られる光景であるが，メインストリートがそのまま他の町と結ぶ幹線道路であるために，市の立つ日などは，車と人がごったがえすこととなる（写真７参照）。この他に，病院や学校，銀行，信用社，公設農産物市場などがあり，一般の県城の規模を十分に備えている。

農場誌によれば，ここでの市日の取引額は1980年代後半の時点ですでに１日２万元近くに達しており，「小街」の10倍程度となっていた。ある市の日の販売内容と民族構成を以下に見てみよう［东风农场志稿编纂委员会 1988: 323］。

肉　30軒（うちタイ族14軒）	魚　６軒（うちタイ族４軒）
玉子　13軒（うちタイ族７軒）	野菜のタネ　８軒

———————————————————

↘ の所在地は大勐龍景龍鎮であった。その後，文化大革命期に奪権闘争がおこり，一時造反派の手中にあったが，1969年人民解放軍の兵団としての管理を経て，あらためて農墾局の管理下に農場として再スタートしたのが，1975年で，その際に，現在の場所に移転した［东风农场志稿编纂委员会 1988: 12–13］。

16）現在，農場本部から直接勐龍鎮へつなぐ新たな道路も計画されており，それは河の東側を走るため，小街郷は交通の面でもますます取り残されることとなると考えられる。移転はそうした背景のもとに決定されたのであろう。

写真6　現在の東方農場総部
（撮影日 2001年３月30日，著者撮影）

写真7　東方農場前のメインストリート
（写真６と同日，著者撮影）

豆腐	６軒	雑貨	14軒
野菜	272軒（うちタイ族213軒）	飲食	11軒
米	88軒（すべてタイ族）	衣料	32軒
ハニ族でブタを売るもの	17軒	果物	13軒
ハニ族でトリ，カモを売るもの	45軒	さとうきび	17軒

これは80年代の記録であり，現在はそれよりもはるかに多くなっている。ただ，市のない日は市のある日に比べれば売上は四分の一から三分の一に減ると言われており，この地域の交易サイクルがまだ定期市の市場サイクルを色濃く残していることを示している。また，交易の主体もこのあたりでは，タイ族が主流であることが窺える。

ここ東方農場では夜になると今度は閉店した店舗の前の歩道を利用した飲食店が営業を開始する。タイ族独特の焼きトリや焼き魚の店が多く，年間を通じて営業している。しかも，夜になるとタイ族の若者グループがこうした「街」に次々と，深夜まで男女が誘い合って遊ぶため人通りが絶えない。近年では，この遊びのために不可欠な道具として，バイクが急速にこの地域に普及し始めているという。こうした盛り場的な機能もこの東方農場周辺と，勐龍鎮に集中する傾向があるようだ。

中心地について，多くの紙幅を割いてきたのは，それがこの地域の変化のもっとも目立つ部分であるためである。こうした都市的機能は，この地域では農場とともに，外から持ち込まれたものであり，50年代に農場が作られるまでは，存在しなかったといってもよい。景洪ですら，1950年代の初期に瓦屋根で作られた建物が，県政府と教会のみであったと言われており，その他の中心地ではなおさらである。現在ゴム園となっている農地はもちろんのこと，街路樹にヤシの木やシュロの木が用いられているほかは，中国の田舎のどこにでも見られるこの町並みが，わずか半世紀前には，熱帯の森に覆われていたのである。

現在の農場本部の向かい側の通りを少し入ると，そこはタイ族の村である。にぎやかな街路

を一歩入ると，かつての村の光景が現在も残っている。

２．農場の開発と空間の変化

では，次に農場建設による盆地全体の変化を80年代以前と以後に分けて見てゆきたい。

東方農場の初期の開発においては，まずタイ族の村落の周辺に拠点を置いて，原生林の伐採作業に入った例が多く見られる。当時ムアン権力が解体され，「和平協商土地改革」により，それまで王の領地であった土地が国有となったことが，大規模な農場開発の制度的根拠となった。これによって，具体的に村落が使用している土地以外は，実質上，国の意思で開発可能となったのである。人口密度が現在とは比べものにならない状況の中で，村落と村落の間には，平地であっても，多くの空白地帯が存在していた。それは1958年，退役軍人530名と，思茅からの下放幹部（当時「転業幹部」と呼ばれた）270名とともに，現在の三分場である勐龍に初めて到着し，現地の地区書記から農場予定地についての説明を受けた時の回顧に読み取れる。

> 勐龍地区政府に到着した時はもう午後５時になっていた。党の地区委員会書記の彭開玉氏を訪ね，我々の来訪の意図を伝えると，彼は「同志の皆さん，ご苦労様でした。州工委の孫書記がすでに電話で知らせてくれており，皆さんのお越しをお待ちしていました。省農墾局はこれまでにもここに探査隊を派遣して現地調査を行ったことがあるので，ここに農場を作ることについて，我々はすでに承知している。［中略］もとの計画では，南壩龍河（小街河）以北はすでに大勐龍農場ができ，南阿河以東にも農場ができている。しかし河の下段は空白である。そこで，皆さんは曼別郷を中心とする一帯に農場を作ってはどうかと提案したい。［国营东风农场　1994: 9–18］

この話を聞いて，一行は急遽，さらに南阿河を渡って対岸の曼別郷へ進んだ，とある。このように，省農墾局主導で地方政府に通達があれば，現地で適当な土地が選ばれて，入植がはじまるといったプロセスが農場設立にあたって一般的であったようだ。当時，農場と地方政府との間の土地協定なども厳密にはなされていなかった。村レベルでそれがなされるのは「三定政策」が行われる80年代になってからである。これについては後に詳述する。

また，その頃同時に進められていた人民公社化，大躍進政策等の影響もあり，この地域のタイ族の約半数が国境を越えてビルマや遠くはタイのチェンマイあたりまで逃げていったという。[17] 当時の圧倒的な政治状況と社会主義化のもとでは，「抵抗」という形は実質上困難で，タイ族については，伝統的な移住という形で対応していたものと考えられる。当時の入植者の

17）和の調査では，小街郷政府の前郷長によると，1957年から58年にかけて勐龍人民公社の多くの村の住民が境外に移動し，一つの村に５，６軒しか残っていないケースもあったという。1961年ビルマとの国境紛争以降，次々ともとの村に帰還したという。いずれにせよ，動乱や不安定要因によって，この地域一帯で移動，移住するというパターンは歴史的に繰り返されてきた［和　2001: 72］。

森林伐採に対する先住民族からの抵抗があった例として，ハニ族の事例が農場幹部の回顧にある。[18)]

> 1957年３月のある日，まだ夜も明けやらぬうちから二人の労働者を引き連れて，山のふもとの平地の森を切りにいった。すると突然，山の中腹から角笛や太鼓，ドラの鳴り響く音がしたので，見上げてみると，一人のハニ族の老人が竹の御輿に座り，数人の男に担がれて我々の方に向かってきた。立ちはだかった彼等は，めいめい背中に宝剣を背負い，手には大鉈を持ち，我々に向かって大声で何かを叫んでいる。我々は，彼等が何を言っているのか判らないので，そのままにしていると，その老人が何か掛け声をあげると同時に，竹の矢が我々の頭上をヒュッヒュッと通り抜けていった。この時初めて我々は，ただならぬ事態であると察し，皆に急いで身を隠すよう指示した。大きな木のうしろに身を隠し，山の中腹に向かって，大声で呼びかけた。「皆さん，武器は使わないで下さい。何かあるなら，話し合いましょう！」。すると山の上で太鼓が鳴り響き，弓や矢を打つ手が止まった。我々は勇気をもって彼等と話し合うべく，近くに進むと，彼等に取り囲まれてしまった。老人がひとしきり何かを語り，我々も説明を行ったが，言葉が通じないので何ともしがたい。太陽が間もなく沈む頃になったが，彼等は我々を放す様子もない。私はこれはまずいと思い，すぐさま班長を郷政府に向かわせた。郷政府は直ちに幹部を派遣し，この時初めて，ハニ族の老人が何を言っていたのか判った。それは「この土地は手をつけてはならない。これは我々の『龍山』だからだ。『龍山』を斬ったら，村に死人が出る」というものであった。[19)]［李 2001: 43］

このあと，業をにやした農場労働者の一人が，鉈で切りかかろうとする場面もあったが，何とか取り押さえ，衝突を免れた。その後，ハニ族の老人を説得し，その場は何とか引き上げてもらった。この時は結局彼等の主張に譲ることで決着がついたというが，必ずしも敵対的な局面が一般的ではなかった，と回顧録は語る。また，実際に伐採が行われても，何も起こらない，といった事例が見られるようになるにつれ，こうした対立も徐々に表面的には収まっていったようだ。大規模な開発と漢族の流入に対し，何の軋轢も，抵抗もなかったということはあり得ない。しかし，土地の所有権という意識が村レベルで希薄であったことと，当時の政治状況から，このように「聖域」として位置付けられている森に対する抵抗以外にはあからさまな抵抗は，起こりにくかったのも事実であろう。これについては後にあらためて触れる。

いずれにせよ漢族による盆地周辺の中標高山地の開発が急ピッチで進められてゆく中で，勐龍盆地では，平地にタイ族，山地にハニ族やラフ族といった山地系民族という歴史的に形成さ

18）李はここで，開拓にあたった揚文生の回顧録の一文として，紹介しているが，具体的な資料名等は記載されていない。

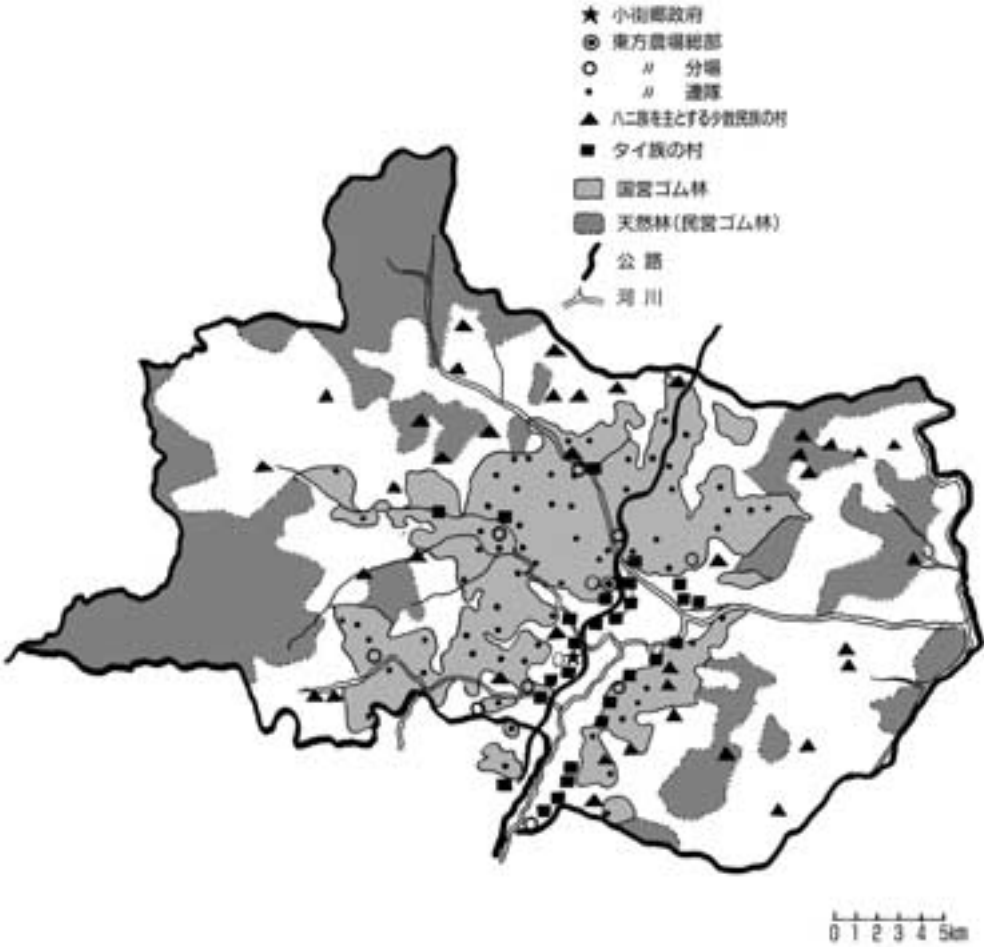
19）この「龍山」という表現は，中国語で記された回顧録の表記によるものである。

れた二元的住み分け構造に変化がもたらされた。漢族がその中間地帯にゴム園の開発を通じて移り住んだことと，ハニ族が60年代の定住化政策に伴って，標高の高い山地から中標高の山地に移り住んだことによって，中標高地区一帯は，徐々に過密な状態へと変わっていったのである。この変化を，地図上で見てみよう。地図４は小街郷における現在のゴム林，天然林と村落の分布図である。[20] タイ族の村落はごく稀に河川支流の中流部分に位置するものもあるが，そのほとんどが平地部分の周縁に位置している。一方，ハニ族の村落は山間部に位置しているが，タイ族村落の背後に位置しているものや，農場の周辺部に位置しているものは，60年代「政治辺防」の名のもとに，標高の高いところから移動してきたものである。そうして建てられた村は皆，当時「革命的」と考えられていた，紅日，紅征，紅江といった村名がつけられている。一方，農場とその分場の居住区は農場内に均質に散らばっているが，この連隊と呼ばれる作業グループは，農場の建てたレンガ作りの集合住宅に住んでおり，付近の村落とはまったく異なった生活空間を形成している（写真８参照）。組織的にも，農場の労働者は国営の「単位」から給料をもらい，退職したあとも退職金で生活しているために，山中に生活していても，地元の少数民族や他の村落の住民とはまったく異なるリズムで生活をしている。こうした中で，農場労働者の保障された生活にあこがれ，農場への参入を希望する村落も出てきている。この方法は，三定政策以降，土地の拡大が容易ではなくなってきた中で，農場の土地を拡大するために，村落人口を一緒に取り込むという方法がとられるようになったもので，勐棒農場などで実際に行われている。ただ，勐龍においてはそういった方法は取られていない。80年代に拡大した14分場は，バカ村からプホ村に向かう道の周辺に広がっているが，これはかつてバカ村の人々が開拓し，「輪閑地」として放置していたところを現在の政策に移行する以前に農場が農地として収容したものであるという。そこで働く労働者は，農場職員の子弟などでこれま

写真8　農場労働者の住宅
（著者撮影）

写真9　国境付近まで広がる民営ゴム園
（著者撮影）

20）この図は，小街郷の林業站の壁面に掲げられていた小街郷地類山林分布図の写真撮影版をもとに作成したものなので，縮尺は明らかでない。また，この地域の地図としては1980年代後半から1990年代にかけて雲南省の地図測絵局が作成した各県ごとの，等高線入り15万分の１程度（県によって異なる）の地図が，大変有用である（景洪県の一部は地図１として本稿に掲載）。



地図4　勐龍盆地小街郷の村落分布とゴム林の分布

での分場では受け入れる余地のない労働力であった。民営のゴム園はその奥に広がっている。写真９はプホ村に向かう道から撮影したものであるが，ミャンマー国境付近まで，見渡す限りのゴム園が山を覆っている。

また，盆地の西側には比較的深い山があるが，ここも農場の発電所を見学に訪れた際に，農場の幹部が近年ラフ族が発電所の水源林を次々に伐採して焼畑にしており，水量が減って困っているともらしていた。写真10，11が水源林の様子であるが，昨年まで竹林であったという山は，急斜面以外はすべて，畑作地となっていた。また，農場幹部が入植した当時には，切りだした竹を川に流して下流に送っていたのが，現在は竹を流すことのできる水量はもはやなくなっているという。

こうして，農場そのものの拡大は80年代以降，それほど見られなくなったが，土地の利用

写真10　焼畑によって畑作地となった農場発電所の水源林
（撮影日 2002年２月２日，著者撮影）

写真11　勐龍盆地のラフ族の焼畑地
（写真10と同日，著者撮影）

権が確定されるようになり，また農場の社会的影響が本格的に浸透し始めるにしたがって，盆地周辺の森がゴムや畑作地として急速に姿を変えていったのである。

III　ゴムと民族間関係――周辺諸民族への影響

では，開発の第二段階ともいえる80年代以降，どのようなプロセスで土地の利用に変化が見られ，それが民族間の関係にどのような影響を及ぼしていたのか，やはり同じ勐龍盆地の事例から見てゆきたい。

ただし，ここで論ずるのは，いわゆる民族問題やエスニシティの問題ではない。国家の土地政策や森林や土地の利用に関して，民族間エスニシティ間の関係がどのように揺れ動き，衝突や調和を図ってゆくのか。また逆に土地問題が民族間の関係にどのような影響を与えているのか，といった問題である。対立や融合の基本単位は必ずしも「民族」にあるとは限らないが，村が基本的に民族ごとに分かれており，土地の境界の確定の際には，村と村，村と農場の関係が突出し，それが民族間の矛盾として認識されることが多い。本稿では，一つの盆地が，標高差に応じて住み分けられ，民族間で一定の秩序化がなされていた情況から，農場の建設や漢族移民の流入，80年代の三定政策などの土地の区画政策，ゴム栽培の普及などを通じて，どのように変容していったかというプロセスに主として注意を払うため，民族間関係を土地問題あるいは盆地の住み分けの変動に関わる問題としてクローズアップする。

１．三定政策の影響

三定政策は本来，山地の利用権がこれまであいまいであったことから，十分な管理がなされ

なかったとして，全国的な生産請負制の導入と呼応して導入された山地の利用権の確定政策である。これによって，それまで比較的自由に，また曖昧に土地が利用されてきたのが，村や農場との間で境界線が確定され，土地の利用権が明確化されるようになった。その結果勐龍においては，以下のような変化が見られるようになった。

まず，利用できる土地の範囲が確定したことで，旧来の移動式の焼畑などが存立する余地が著しく狭められるようになった。[21] そもそも政策によって，焼畑は禁止措置がとられているが，現実には今日まで行われている。しかし，本来の焼畑は，十分な輪作地が背後にあってはじめて，生態的にも農耕システムとしても，バランスのとれたものとなっていたのが，十分な「輪閑地」が確保できない状況のもとでは，生態的な回復を待つことができず，しかも土地集約性の薄い農耕しかできなくなる。そこで，何らかの定住的な，しかも土地集約性の高い換金作物が，少数民族の間でも志向されるようになるのだが，この盆地において圧倒的に感化力をもっていたゴムが，次々と導入されるようになるのである。これによって，この盆地ではゴム園の周辺に残されていた森林が，一挙に民営ゴム園に変えられた。つまり地図４で天然林とされているところが，現在はほとんど民営ゴム林か畑作地となっていて，余すところなく，広義での耕地と化しているのである。

そしてもうひとつ重要な点は，これまで表立って起こりにくかった，農場との土地問題がこの三定政策以後，きわめて深刻な問題として生起するようになったということである。農場の側から見ると，少数民族による土地の不法占拠，ないしは，「偷膠」つまりゴムの不法採取，といったことが頻発するようになったのだが，少数民族の側からすると，「ここはもともと我々の土地であったのに，農場が我々の土地を不当に占拠し，しかもその土地から莫大な利益を得ている」という主張になる。開発の当初は明らかでなかったゴムの収益性も，80年代初頭には十分に，周辺諸民族の目にも明らかなものとなっていた。これに対して，不便ではあるが，展開の余地のあったハニ族など山地に住む民族の方が，民営ゴム園を拡大する機会に恵まれたが，平地に住むタイ族はすでに，周辺の土地が利用し尽くされているために，展開の余地がなく，ゴム園との衝突がより多くなる傾向にあるという［和　2001: 53–54］。ここに三分場と隣接するタイ族の村落との間に起きた土地紛争の事例を紹介しよう。

1997年１月のある週末，陸稲の植付けのシーズンに，曼景坎村の村民100人あまりが，農場の水田120畝あまりを占拠した。この占拠は組織だって行われたもので，その日のうちに竹の棒などを建てて農地を分割し，農場と地方政府が対応のために出動した週明けには，すべて水田の植付けを終えてしまっていた。郷政府はこれを案件として処理しようとし，政府土地部門

21）雲南における焼畑が，地域の生態に適合した持続的なものであったとする研究は，本研究の中国側協力者でもある雲南大学教授尹紹亭によるものが代表的なものとして知られている［尹　1991; 2000］。

などとともに，40台の車やトラクターを派遣し，これにあたった。村民は皆，手に手に鋤を持ち，トラクターの前に立ちはだかって現場は騒然となった。そもそもこの土地は，農場設立当時，農場の食糧確保のための水田として，農場幹部が，村の老人から３頭の馬と25リットルの酒と交換に譲り受けた土地であった，という。老人は，村の人口が今日ほど増大するとは予想していなかったし，土地がこんなに逼迫するとも思っていなかった，という。しかし，少数民族に対して人口政策が比較的緩やかであったために，人口は増えつづけ，また，周囲の土地を囲い込まれていたこともあり，村の土地は年々逼迫していった。農場の土地関係者によると，1980年代からこの村は毎年，この土地に隣接する窪地などを埋め立てて，耕地を拡張していたという。これまでは村民との関係悪化を恐れて，取りざたすることなしに来たのが，ついに大規模な衝突となったものであるようだ。それまでにも，農場の水田内に村民が通路を建設しようとして，衝突が起こったり，秋の収穫のあとの土地を村民が占拠したり，と三分場だけでも当時10年以内に16件の案件が発生し，そのうちの大半が，この近辺のタイ族の村とのあいだに発生していたという。結局，先の１件は県の土地局の調停により，農場側が50畝の土地を曼景坎に譲り，地方政府が三分場近くの国有地500畝を農場側に与える，ということで落着をみた。[22)]

ハニ族の場合は，これほど逼迫した土地紛争は見られないというが，自分たちが現在植えているゴム林は村から相当離れたところにあり，とても不便である，といった苦情や［和 2001: 53］，そもそも我々が開いた土地を，一定時期休閑させている間に，農場は全部ゴム林として収容してしまい，当時土地使用権の確定もなかったので，何の見返りもなかった，といった不満が聞かれる。三分場近くのハニ族の村では，「1966年から３年の歳月をかけて，現在の位置に移住してきた。新しい居住地は小街郷が決定した」という。それによって，かつては山地で焼畑を営んでいたのが，平地に降りてきて，水田やゴム栽培を始めるようになったのである。その村出身で，現在昆明に暮らす若者は，「政府は我々の焼畑を遅れた破壊的なものだというが，そのように押しやったのは，結局……」と言葉を詰まらせる。しかし，こういった意見を口にするのは，主として外部に出た村人であり，村に生活する人は，あくまで利害関係として，また現在の生活を維持するための必要性から，衝突の原因を解説することが多い。つまり，同じ開発という土俵の上での利害衝突であり，利害対立として認識されているのである。

２．変わる生活環境，変わる意識

このように，農場の建設やそれに伴う外来人口の増加に伴い，少数民族の生活空間や意識にも著しい変化が見られるようになった。彼等の生態利用や，焼畑のリズム，「龍山」などとし

22）この一連の内容は和が数カ月にわたって，三分場において聞き取り調査を行っていた際に，タイ族の村落，農場労働者の双方から聞きだしたものである［和 2001: 54］。

て保護されてきた森林に対する解釈と必要性についても,[23] 徐々に変化が見られ，それが盆地周辺の山々の利用と植生の大規模な変化，ひいては盆地全体の生態に大きな変化をもたらすことになった。

三分場近くのバカ村に住むハニ族の老人は,「70年代頃までは，周囲は一面の森林であった。川の魚や山の果物，山の動物たちをとって生活し，野生の動物も，ゾウや野牛なども多くいた。自分たちの生活する地域で森が姿を消し始めたのは77年頃からである」と語っていた。また「70年にダムができるようになって，水源をそちらに頼るようになってからは，山を守る思想がだんだんと薄れていった」という。家の作り方も，以前は自分たちの伝統的なやり方にしたがっていたが，今は，タイ族の真似をしてタイ風に建て，レンガやコンクリートを使用することも多くなったので，木や竹を守る必要性も薄れてきた。66年に移住した当初は，それまでにやったこともない水田耕作や，慣れないことが多くて大変であったが，今はそれも慣れてしまった。ゴム栽培については，技術講習を農場で受けたりするものもいる（写真12参照）が，ゴムの収穫期には，数カ月間早朝の３時から日の出までにゴムを集めなければならず，自分たちではできないので，農場で働いたことのある漢族の労働者を雇っているものもいる，という。また，80年代以降に土地をゴム園として売ったという村もあり，広東省の業者に土地を売却して収入を得たという村もあった。

一方，平地のタイ族の村では地理的にゴム園の拡大が困難であること，大半が公路沿線に村落があること，などを反映して，商業や国境貿易などに活路を見出す傾向が強い。勐龍からミャンマー国境に抜ける国境付近では，90年代以降，水牛をタイに輸出する国境貿易が盛んで，勐龍の南北の公路沿いのタイ族の集落は，ほとんどこの国境貿易に何らかの形で関わっている。省内では麗江や元江，省外では四川，貴州などから，続々とこの地域に運び込まれてくる水牛を買い上げて仲介業者に販売する。国境付近の村では，タイ側の商人と連絡をとり，人を雇って毎日，ミャンマー側に牛を送り出し，ミャンマーのメコン河の港で貨物船に乗せ，北タイの業者に売却する。収入はまちまちであるが，一頭につき一度仲介人の手を経るごとに100元ほど上乗せされ，最終的なタイでの売価は3,000元ほどになるようだ。支払いはバーツによってなされ，現地で雑貨などを仕入れて帰

写真12　ハニ族にゴム採取技術を教える
出所：［東方農場誌稿編纂委員会 1988］

23）タイ族が伝統的な生活空間の不可欠な部分として維持してきた「龍林」（ないし「龍山」）が水源林，薪炭林，防風林としての役割を果たしていた事を空間配置や灌漑とともに論じた近著に高［1999］がある。

るものもいる。長距離輸送で体力を消耗した牛はミャンマーの港までトラックで輸送されるが，税金と輸送費がかかるのを嫌って，人を雇って徒歩で国境を越え，港まで２日以上かけて牛を追ってゆく。はっきりとした数字はないが地元の人々によれば，毎月600～700頭は勐龍を経てタイ側に送り出されているようである。タイ側での消費と堵殺の過程については高井［2002］に詳しいが，タイ語で互いに通じ合え，陸路で北タイとの距離がもっとも近い勐龍国境付近のタイ族の村にとって，この水牛の交易は重要な収入源となっている（写真13，14，15）。中国から水牛が売られる背景には，タイでは耕作の機械化に伴って水牛が姿を消していること，中国においては，現在まさに耕牛の需要が激減し，その処分のため売り手が増加していること，中国では水牛を食することが少ないために，水牛を好むタイへの販売が加速されるといったことが挙げられる。また，山西などで買い付けた果物をタイに売りに行き，タイの日用品を中国側に仕入れたり，と広範囲な商品流通に携わる者もいる。これは勐龍の国境が，一般の旅行客の往来を開放しておらず，もっぱら通行証を持つ地域の人々の往来に限定していることとも関係する。こうして，国境貿易で得た利益をもとに，大型トラックを保有する村人や，タイで買い付けてきた高級車を持つ村人なども現れ（写真16，17参照），住宅様式もレンガやタイルをふんだんに使ったコンクリート製のものへと変わりつつある。

こうした中でかつてタイ族が生活の中で維持していた森や水との関わりも，今は大きく様変わりしている。周囲にゴム園ができたことで，地表水の流れが変わり，かつては豊かに流れていた生活用水も，今は井戸水に頼らなくてはならなくなった［张　2001: 11］。またゴム林は保水性に乏しいため，洪水もしばしば起こるようになった。最近では2001年の秋に，大規模な洪水が景洪農場で起こり，水辺に住むタイ族の村が多く被害にあった。この地域ではこんな洪水は初めてであるという。

現在，この勐龍の盆地で，50年前にふんだんにあった原生林を探すことはきわめて困難である。小街の「林業站」の人の案内で，ようやく２カ所，わずかに残された原生林の片鱗を訪ねることができた。その一つは，林業局のすぐそばにあり，公路からわずか数百メートル入ったところに残されている127畝（8.47ヘクタール）の原生林である。ここはかつて植物所の管理する土地であったために，現在のように奇跡的に残されているということであるが，付近にはタイ族の村があり，その一部を切り出して小学校を作ったり，また村民がこっそり入って大木を切り出したり，とその保全は困難であるとのことであった。我々が足を踏み入れた際にも，樹高30メートルはあるかと思われる大木やシダが生い茂り，森の外では聞くことのなかった熱帯の野鳥の声が響いていた（写真18参照）。しかしその一方で，各所に鉈を切りつけた跡や，切り倒されて間もないと思われる大木の切り株があり，様相は刻々と変化しているようであった。「林業站」の青年によれば，こうした伐採は人目につかない夜間に行われているという。2000年にタイ族の「大佛爺」が埋められた場所に案内されたが，その周辺の樹が切られずに

写真13　タイ族の村を中継地として再びトラックにつみこまれる水牛

写真14　他地域から運び込まれた水牛

写真15　牛の国境貿易で何度かタイに行ったことのあるタイ族の男性
（後ろにあるのは最近購入した車）

写真16　勐宋に近い最終中継地の村で

写真17　国境貿易で盛んなタイ族の村では各家にトラックがある。

（写真13–17　著者撮影）

残る以外は，保全は難しいと嘆いていた。また，この他にも，同じ公路沿いに「ピー」（タイ族の信仰する精霊）がいるために切られずに残っている森があるというので，訪れてみたが，そのすぐ手前はタイ族の村が経営する民営ゴムの加工場になっており，現在もその森の方向に拡張する工事が行われていた。実際に村の人に案内されて森の中に入ってみたが，村の人々にピーの存在を聞いてみても，ほとんど否定されてしまった。かつての生産大隊長であるタイ族の老人も，「たまたま水源林として残ったのだろう。今はそんな『迷信』は信じていない」といい，村人も「以前，高い樹にある蜂の巣をとろうとして落ちた村人が気が狂って死んだことでその樹には近づかないようにしているけれど，それ以外は木を切ったり，竹を切ったり，必要な時にはこの森に入って利用している」という。我々を森の中に案内してくれた若者は，たばこの吸殻を森に投げながら，そのように語った。森から出るときに，裸足にゴム草履を履いていたその人の足にはヒルがまとわりついていた。このタイ族の村では130畝くらいゴムを植えているが，一人あたりにすると１畝にも満たない，現在はこの森は，竹林の供給林としてまだ個人には分配されていないが，個人に分配されれば，すぐさま切り開かれるであろう，と人々は語っている。

写真18　小街郷の近くに残された８ヘクタール程の原生林に残る樹(著者撮影)

この森はかつて実際に「龍林」として恐れられていたものであろう。それは，むしろこの地域の伝説や言い伝えに詳しいハニ族の青年が，おじいさんから聞いたといって知っていた。しかし，現在の老人は50年代以降に壮年期を迎えた「革命世代」であり，「迷信」という言葉を用いて，森の合理的な利用にむしろ価値を見出す世代であった。若者に至っては，その森の存在すら意識にとどまっていない。かつて農場がこの地を開発した際には「民族関係」に配慮して「龍山」は残すことが多かった。しかし土地の利用権が確定されてからは，限られた土地で超過した人口を養わなければならない，という必要性から，森を守ってきたタイ族の手によって，「龍山」が開発されるようになった。水の利用を地表水に頼らなくなったこと，建築用材がレンガになっていったこと，などがその背景にあり，「龍山」を保存する物質的根拠が低減していることが挙げられる。そしてそれに伴って，森を守り，森によって支えられてきた「神」が消えようとしているのである。現にタイ族のかつての村長は「ピーなどいない」と言い切る。現在この盆地の平地部分に残されているわずかな原生林も，たまたま偶然に残されていただけであり，現在とこれ以降，保存されてゆく何ら確かな根拠も有していない。つまり，存続は風前の灯火であり，何らかの条件が加われば，いとも簡単に消滅しうるものである。

おわりに

以上，1950年代からの漢族の流入と，中標高地区への国家的，組織的な環境改変，さらには1980年代の三定政策以降の第二段階ともいえる，個別的，分散的な開発行為によって，西双版納のメコン河流域における盆地の景観が一変してゆく過程を，資料と現地の調査によってあとづけてみた。わずか半世紀の間に起こった，この劇的ともいえる環境変化は，当然，同地の生活や民族間関係をも変化させた。この間，盆地の土地利用の変化を図式的に表すと図２のようになる。山地系の民族と平地のタイ族を分け隔てていた丘陵地の熱帯林が，50年代以降開発されて国有のゴム園に変わり，同時にハニ族などの移動民族の定住化が図られ村が中間の丘陵地帯に密集するようになる。その後，土地の使用権が確定されることによって，それまで焼畑で循環的に利用されていた，盆地周辺の山の頂上まで民営ゴム園となる。このようにして，50年前まで，野生に満ち溢れていたこの辺境の大地は，ゴムという栽培作物を媒介として，

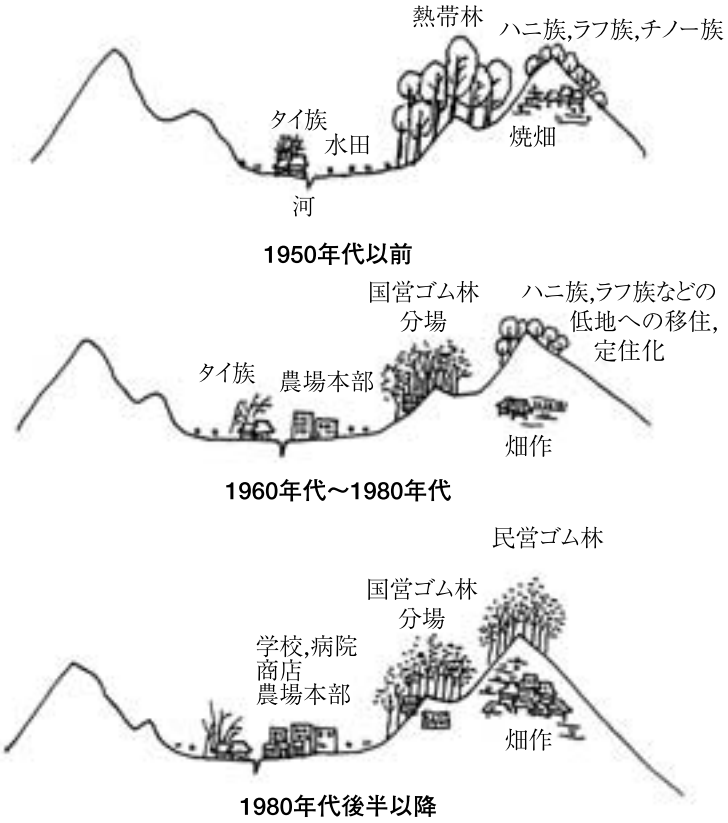


図2　勐龍盆地における土地利用の変遷図

国家の介入が行き届く，制御された空間へと様変わりした。ゴムは物質的にも必要とされていたが，かつて制御不可能であった一帯の空間を，国家に取り込むうえでも必須の作物でもあったといえる。ゴムを契機として，多数の漢族が移り住み，国営農場という国家の影響力のきわめて強い社会実態が，この西双版納の盆地の各地に出現することは，国境防備という点からもきわめて重要な意味を持つものであった。

写真19 開拓当初から景洪農場で働く退職労働者の夫婦（著者撮影）

こうして，国家にとって「未開」で手の及ばない空間が消滅すると同時に，それはそこに住む少数民族の生活空間や意識に対しても，至近距離から改変する大きな原動力となった。病院の建設や電気の供給，中心地の形成や，学校の建設，こうしたさまざまな「近代的」設備は，すべて農場を通じてもたらされた。タイ族は農場労働者として移り住んだ漢族に野菜などの農産物を売ることに自己の利益を見出し，ハニ族は農場によってもたらされたゴム栽培を山地で自ら行うことで，現金収入の道を得た。そして，国家の定住化政策によって低地に移り住み，米を植え，灌漑水や井戸水に頼って生活するようになる。そうした一連の変化の中で，彼ら自身の世界観の中からも，徐々に神々が姿を消すようになったのであろう。「龍山」はかつての生活サイクルの中では，維持，保全される必要があったのだが，新しい生活サイクルの中ではその存在意義を失い，それに伴い神々の社会的意義も薄れてきたのである。ここでは，神への怖れは開発に対する抵抗の力とはなり得なかった。

もちろん，あらゆる神々の存在が失われているわけではない。例えば，先の勐龍の盆地では，かつて山地のハニ族と平地のタイ族がせめぎあっていた名残として，タイ族が殺害したハニ族の霊的指導者（アーカーソンパー）の墓に今でも，青々とした葉や作物の苗などが置かれている。置いているのはタイ族で，敬って供えているのではなく，死んだ霊が復活するのを恐れて，生きた植物をつねに，その墓の上に乗せているという。また，タイ族の仏塔の周辺や，「佛爺」が埋葬された場所の木は現在も切ってはならない聖域とされている。しかし，これらはごく象徴的に意味をなしているだけで，まとまった森を守る力にはなっていないのが現状である。

今日，漢族や国家の側は，より進んだ考えとして「環境保護」に力を入れ始めている。その中で，糾弾の対象となるのは，「遅れた知識をもつ」少数民族の焼畑であり，彼等の「盲目的」な開発行為である。また，ゴム園にしても，計画的で整備の行き届いた国営農場の農園に比べ，少数民族の農場は粗放で，管理が行き届かず，生産力も低いとされ，劣位に置かれている。少数民族は，さらに農場のゴムを盗んだり，土地を不当に占拠する存在としても位置付けられ，

それが少数民族に対する評価をより低いものにしている。

しかし，この半世紀の流れをみてゆくと，この土地の開発に，もっとも主要な力となったのは，まさしく国営ゴム園であり，またタイ族とハニ族の二元的な居住空間に入り込み，土地利用を逼迫したものにしたのは，外来の農場であり，漢族の移民であったことは明らかである。そしてその結果，少数民族自身が現在は，破壊の主体となる作用を及ぼすに至っているのである。

ここで開発の犯人探しを行うことが目的なのではない。西双版納における現在の開発問題は，他の多くの事例と同じく，単に「外来＝破壊的」「在来＝保全的」という図式で描くことは困難である。大規模な国家介入によって，それまで，手のつけられなかった野生が大きく姿を変え，それに伴って在来民族が大きな変化を受け，やがて自らが積極的な開発の主体となる。そうした状況を指して，国家は保全的，在来の少数民族は破壊的という図式さえもが語られるようになったのである。[24] いずれにせよ，こうしたプロセスを経て，この地域の植生や人々の生活，地域の環境との関わりは，大きく様変わりした。そして，この土地の生物多様性は人間によるこうした社会経済的関与によって大きく揺るがされることとなったのである。

謝　　辞

本研究は，平成11年度～13年度文部科学省科学研究費基盤研究（A）(2)「メコン河集水域における自然と文化の相互関係にかんする生態史的総合研究」（研究代表者赤木攻　大阪外国語大学）の一環として雲南大学尹紹亭教授と合作共同研究を行った成果の一部である。本研究は科研代表者の赤木攻先生はじめ科研研究グループの先生方のご理解とご教示を受けて実現したものであり，また尹紹亭教授との話し合いから多くの示唆とテーマ設定にかかわる着想を得た。また現地調査の協力者，李暁凝（西双版納電視台），張实（雲南大学），和渊（雲南大学）（敬称略）にも大変お世話になった。記してここに謝意を表したい。

本稿は平成14年度科学研究費報告書『メコン河集水域における自然と文化の相互関係にかんする生態史的総合研究』に発表した同名の論文をもとに，加筆修正したものである。

引用・参考文献

日本語文献

阿部健一．1997.「雲南の森林史（Ⅱ）――中標高盆地の森林破壊とユーカリ植林」『東南アジア研究』35(3): 445–464.

秋道智彌．2002.「野鶏との出会い――中国雲南省・ラオスの少数民族における事例」『メコン河集水域における自然と文化の相互関係にかんする生態史的総合研究』（平成11年度～13年度文部科学省科学研究費基盤研究（A）(2) 研究成果報告書　研究代表者　赤木攻），43–56ページ所収．大阪外国語大学．

陳凱歌．1990.『私の紅衛兵時代――ある映画監督の青春』刈間文敏（訳）．講談社現代新書．

24）本共同研究では，「自然保護区」がもたらす社会的意味についても調査が行われている［街 2001］。自然保護区に指定されることで，これまで地域の村で，密接に関わりあいながら利用されてきた山が，隔離されてしまうことによって新たな問題が生じている。また，近年ゾウの保護をめぐって，ゾウを捕獲することができないため，深刻な被害を受けている村の事例などが，同地では論議されている。こうした論点は秋道［2002］が指摘する内容とも一致する。

ダニエルス, C.；渡部　武．1994.『雲南の生活と技術』アジア文化叢書．慶友社.
長谷川清．1991.「父なる中国・母なるビルマ――シップソーンパンナ王権とその〈外部〉」『王権の位相』松原正敏（編），380–408ページ所収．弘文堂.
――――．1998.「国境を越えるネットワークとエスニシティの動態――雲南省・シプソーンパンナー，タイ・ルーの事例から」『東南アジア研究』35(4): 620–641.
加藤久美子．2000.『盆地世界の国家論――雲南，シプソンパンナーのタイ族史』京都大学学術出版会.
永塚鎮男．1997.「土壌・土壌分布」『熱帯中国――人間そして自然』吉野正敏（編），309–327ページ所収．古今書院.
高井康弘．2002.「肉食・とさつ・定期市――タイ・ラオスにおける牛・水牛と人の関わりの変容」『メコン河集水域における自然と文化の相互関係にかんする生態史的総合研究』（平成11年度～13年度文部科学省科学研究費基盤研究（A）(2）研究成果報告書　研究代表者　赤木攻），5–27ページ所収．大阪外国語大学.
白坂　蕃．1997.「雲南における農業的土地利用とその地域的特色」『熱帯中国――人間そして自然』吉野正敏（編），339–383ページ所収．古今書院.
菅野博次．1995.「中国・西双版納タイ族自治州への漢族移住とその社会的影響」『アジア経済』36(4): 41–64.
尹紹亭．1998.『雲南の焼畑――人類生態学的研究』白坂蕃（訳），林紅（翻訳協力）．農林統計協会.
吉野正敏．1993.『雲南フィールドノート』古今書院.

英語文献
Shapiro, Judith. 2001. *Mao's War Against Nature: Politics and the Environment in Revolutionary China*. Cambridge University Press.

中国語文献
阿城．1997.『棋王・樹王・孩子王』（台湾版）．海風出版社.
东风农场志稿编纂委员会（編）．1988.『东风农场志稿』
高立士．1992.『西双版纳傣族的历史与文化』（民族调查研究丛书）．云南民族出版社.
――――．1999.『西双版纳傣族传统灌溉与环保研究』云南民族出版社.
国营东风农场（編）．1994.『东风第一枝』
国营景洪农场场史征集办公室．1986.『国营景洪农场三十年』
和渊．2001.「西双版纳――二十世纪整合中的中国边疆」云南大学硕士学位論文．（『雨林啊胶林――西双版纳橡胶种植与文化和环境相互关系的生态史研究』尹绍亭・深尾叶子（編），2003，云南教育出版社に部分採録，220–243.）
华思文（Watkins, Laurits, Steven）．2000.「泰傣民族发展史中的勐文化」云南大学博士学位論文.
街顺宝．2001.「文化秩序与生态危机――西双版纳基诺山巴卡小寨的生态问题」未発表.
景洪农场发展史编委会．2001.『景洪农场发展史初审稿』
景洪县地方志编纂委员会（編）．2000.『景洪县志』云南人民出版社.
黎明农工商联合公司党委场史编写办公室（編）．n.d.『黎明农场三十年――之二―― 回忆录』
李晓凝．2003.「最后绿洲的绿色巨人――西双版纳与橡胶」『雨林啊胶林――西双版纳橡胶种植与文化和环境相互关系的生态史研究』尹绍亭・深尾叶子（編），260–320．云南教育出版社.
西双版纳州政府接待处（編）．1993.『西双版纳概览』云南民族出版社.
杨晓冰．2003.「勐腊地区的资源利用，演变，动因及前瞻」『雨林啊胶林――西双版纳橡胶种植与文化和环境相互关系的生态史研究』尹绍亭・深尾叶子（編），176–199．云南教育出版社.
尹绍亭．2000.『人与森林――生态人类学视野中的刀耕火种』（边地文化丛书）．云南教育出版社.
张实．2001.「西双版纳勐龙坝地区的发展与变迁――论橡胶种植对当地经济，文化和生态的影响」『雨林啊胶林――西双版纳橡胶种植与文化和环境相互关系的生态史研究』尹绍亭・深尾叶子（編），244–259．云南教育出版社.
赵鼎汉（編）．1999.『云南省地图册』中国地图出版社.
云南省景洪县志编纂委员会（編）．2000.『景洪县志』云南人民出版社.
云南省勐海县志编纂委员会（編）．1997.『勐海县志』云南人民出版社.
云南省勐腊县志编纂委员会（編）．1994.『勐腊县志』云南人民出版社.